

寄稿

「寄生木」のなかの普代の人



東京都 医師

熊谷文弥

(鳥居出身・七四)

一巻

五二頁

普代村ふれあい交流センター館長金子功氏は今回は「寄生木」の中に普代の人が出ているはずだから調べて村民に教えてくれるように」と、ということが要望であった。

「寄生木」は徳富蘆花(健次郎 明治元年—昭和二年、一八六八—一九二七)という人の書いた小説であるが、原著というか、草案というか宮古市山口の小笠原善平(明治十四年—明治四十一年)という人の手記が元であることは、地元の人はずいぶん知っている。

健次郎自身がこの本の序文に「正当に言えば、寄生木の著者は自分ではない」とはつきり書いている。私は旧制宮古中学校(現 宮古高校)のとき、敗戦後の昭和二十一年か二十二年ころ、同級生の某君から粗末な印刷の「寄生木」を見せてもらった記憶がある。

金子功氏は、普代村図書室には「寄生木」が所収されていないことから、平成

十四年十月宮古市立図書館にまで出掛け調査され、関係資料を筆者に送付した。

「寄生木」とは、広辞苑によると他の樹木に寄生した木、ほや、ほよ、とある。普代地方では「ひよ」と呼ぶあれである。

大木の枝分かれしたところなどによくみられ、冬に大雪の降ったときなど地表の食物を探せない「キジ」「山鳥」などがこの「ひよ」を食べているところなど見かけた人もいると思う。

小説「寄生木」の文中では、小笠原善平は「篠原良平」となっていて、自分を大きな木に寄生する「ひよ」にたとえ寄生される乃木將軍は「大木將軍」になっている。

徳富健次郎によると小説「寄生木」の発刊は明治四十二年(一九〇九)とのことである。

私は「寄生木」を所持していないので宮古市出身の知人で、K書店に勤務されたK・K氏という方から昭和三十一年岩波書店発刊(絶版)の文庫本全三巻をお

借りし、普代村ふれあい交流センター館長金子功氏ご要望の「普代の人」を見出したので主たる箇所を紹介する。

良平は小犬の様に祖母についていった。隈谷先生閉口して「まあ調べて見ましよう。」

一四六頁

教員の中にも隈谷先生は雲井龍雄の崇拜者であった。一日高吟した。

注 隈谷先生：熊谷精治氏(明治四年二月六日 生)

この先生は、普代村菅渡屋号「橋場」現普代村村議会議員熊谷耕氏の祖父である。有耕氏の姉上、水沢市在住の高橋恵子さんも「寄生木」の中の別名で書かれた祖父精治氏のことを筆者に教えてくれたことがあった。同氏は第六代普代村長にも就任された。

普代元村にこの先生の縁故の方々がおられる。

熊谷有耕氏のご尊父熊谷新平氏から聞いたことがあるが、菅渡屋号「橋場」熊谷

家は堀内「浜坂」熊谷家の本家であり、商標「八」である。分家の「浜坂」は八二と称し、さらに分家である熊谷巖代議士の生まれた宮古の「熊平」熊谷家は八三とのことであった。それぞれ本家に対し敬意を表したものであろう。

(尚)隈谷先生：熊谷精治氏記述については孫熊谷有耕氏よりご了承いただいた)

一七〇頁

：菅江七右衛門君は中学三年で病気になるが岩手病院に久しく入っていたが阿父さんに連れられて帰る途中、閉伊川道中で亡くなった。宮古常安寺に写真が祭られて居る。其友人隈谷君の弔詩が掛かって居る。

玉樹凋殘花色凄 十年風月一朝暎
幽魂知否輓詩就 別有春愁不勝題

普代村ふれあい交流センター金子功氏は、「これが中学生の詩なら熊谷巖は大変な秀才でしょう」と言っていた。確かにそうであろう。

二五二頁

講堂から蜘蛛の子を散らす様に中学生が出てきた。(中略)菅江君、隈谷君も